月刊
言語
670
2009
7
Vol.38・No.7
2009年7月1日発行（毎月1日発行）第38巻第7号通巻456号　昭和47年8月12日第3種郵便物認可

特集 変容する日本のことば

言語の危機と話者の意識

日本の言語状況　佐々木 冠
——多様性は失われるのか

アイヌの人々とアイヌ語の今　佐藤知己

秋田における方言の活用と再活性化　日高水穂
——フォークロリズムの視点から

九州における言語の危機と話し手の意識　太田一郎

琉球語の危機と継承　西岡 敏

関西における方言と共通語　井上文子

日本語の多様性が教えてくれるもの　八亀裕美

◆巻頭エッセイ
黒岩比佐子／饗庭孝男

◆特別記事
新時代の記述言語学〈上〉
——つながる言語記録にむけて
中山俊秀

連載◉インド学へのいざない［4］

仏教の成立

後藤敏文（ごとう　としふみ）

仏教はゴータマ・ブッダの教えに由来する。インドを超えて広く伝搬し、各地で独自の展開を遂げ、今日に生きる宗教である。我が邦にも漢訳仏典を通じて伝来し、日本仏教を生んだ。本邦の仏教研究には、各分野にわたり歴史がある。ここでは、ブッダの教説がヴェーダの宗教を乗り越えるべく成立したという点に焦点を当てて見てみたい。

1　六師外道（ろくしげどう）

ゴータマ・ブッダの活動は、紀元前四〇〇年前後の数十年間と考えられる。先行するウパニシャッドの成立時代には、「アーリヤ化」のフロンティアはガンジスの北側、ジャナカ王率いるヴィデーハ国にあった。ブッダの時代には、マガダ国がパータリプトラ（パトナー）を中心に、ガンジスの南に勢力を拡大した。ブッダは「ウルヴェーラー川の亀」と呼ばれる当地の有力バラモン学者に（おそらくは論争で）勝利し、マガダ国王ビンビサーラの帰依を受けて、同国を中心に多くの出家・在家の信者を得た。

ブッダと、父王ビンビサーラを亡きものにしたアジャータサットゥ王との対話が「沙門果経」としてディーガ・ニカーヤ（『長阿含経』に相当）に収められ、当時の様子が窺われる。同経には「六師外道」とよばれる非正統学者たちの学説が紹介されている。学匠たちは学派を率い、国家

建設に有用な人材であったと思われるが、その哲学的部分だけが今に伝わる。アテーナイのソフィストの時代を思わせるところがある。ジャイナ教の事実上の開祖マハーヴィーラや、不可知論的論証命題によって知られるサンジャヤも六師に数えられる。サーリプッタ（舎利弗）やモッガッラーナ（目犍連）をはじめ、有力な弟子がブッダの下に移り、弟子を失ったサンジャヤは吐血して死んだと伝えられるが、仏教の論証式は沙門果経が皮肉を込めて紹介するサンジャヤのそれに他ならない。「あり」、「なし」の他に、「あり、かつ、なし」と「あるのではなく、ないのでもない」を加える「論理」は、世界に果てはあるか、時間は有限か無限か、死後の存在はあるか、精神主体と肉体は同一か、に集約される当時の形而上学的難問に対する特殊な弁論術に遡るように思われる。

ゴータマ・ブッダは現世における苦の解消を緊急課題とし、こうした問いに答えるべきではないとして（「無記」）、救済の哲学を貫徹した。「毒矢の喩え」には、毒矢に射られた瀕死の人間が、矢を射た者の素性や弓の種類、矢の部材や毒の成分を問うような愚かなことであると説かれる。ブッダはもともと説教を意図しなかったが、ブラフマー神（梵天）がインドラ（帝釈天）とともに説得し、聞けば理解できる中程度の能力をもつ者たちのために説教を決意したという伝説が残る（梵天勧請）。

2 「業と輪廻」の克服

六師の言説中にはブラーフマナ時代の「祭式と布施の効力」を巡る議論の余韻が見られるが、ブッダやジャイナ教の開祖が直面した課題は、ウパニシャッドにおいてさらに展開した「業と輪廻」、それも、先回「死にゆくとき」として紹介したヤージュニャヴァルキャの教説そのものであった。同説は、医学理論をも含む後のインド思想の公理となっている。

カルマン「業」という語は確立していたが、サンサーラ「輪廻」はヴェーダ文献にはなく、仏典に初出の可能性がある。「完全に一巡すること」を意味し、地上―天界―地上の循環完結を想定した用語である。一個人の辿る道だけが問題で、そこには「親の因果が子に報いる」余地は無い。

この観念はブラーフマナにおける「再死」の議論を引き継いでいる。再死とは、死後天界に生まれ変わった者が再び死に、地上へ再生することを意味した。当時の解脱は祭

式によって天界で不死を獲得することにあり、ブラフマンの世界への帰入とされたが、詰まるところ無に帰すことである。そこで、中性原理ブラフマンを男性の神名に読み替え、ブラフマン神の住む極楽の観念が接ぎ木される（カウシータキ・ウパニシャッド）。ブッダのニルヴァーナ「涅槃」に極楽世界が加わる歴史は、ヴェーダ時代に既に一度経験されていた。ニルヴァーナはヴェーダ語で「消滅」を意味したが、同音の別動詞「（風が）吹く」によって「（灯火）が吹き消された状態」と再解釈されるに至った。ブッダは王族と見なされる部族の出身ながら「不死への門」を開いた「真のバラモン」であった。この表現には、不死（アムリタ）こそが究極の目標であり続けたことが示されている。

3　四苦と四聖諦

ゴータマ・ブッダの最初の説法は四つの真理（「四聖諦」）であったと伝えられる。聖は「アーリヤ」の漢訳で、「貴い」とも「アーリヤの人々、つまり、一般人士にとっての」とも解される。第一の真理は輪廻中の存在は苦であるという現実である。「四苦八苦」は主要な苦を提示した仏教語に由来する。「生老病死」の四苦の中、「生苦」は天界での「再死」を捉え直したもので、神的存在たる資格を失って地上に再生することを意味したため、否定的に捉えられている。

苦は生きている限り存続する欲求（タンハー「渇き、渇愛」）から生じる（第二の真理）。それを押し止めることによって解脱（涅槃）に至る（第三の真理）。そのための方法として、正しく見ること（正見）から始まる八段階の実践（八聖道）が説かれる（第四の真理）。法と縁起（→5）を正しく認識して、事物には恒久的実体がないこと（空、無我）に目覚め、他学派が説く苦行と世俗的祭式主義の両方を離れた中道を行くことがブッダの教えであった。

4　無我と「行」

正統バラモン思想は輪廻主体を恒久不変のアートマン「自己」とし、宇宙原理ブラフマンとの合一を目指した。ブッダは輪廻主体の実在を否定するが、「アートマンが存在しない」と直接主張することはない。自己を姿形、感受作用、表象機能、構成、認識作用（識）の五蘊「五つの枝張り」に分け、そのどれもが「自己」ではないとする論理

を用いる。（ヤージュニャヴァルキャの「ではない、ではない、としか述語できないアートマン」が想起される。第3回参照。）

理解の鍵は、「構成」としたサンスカーラ（「行」）と実在（サッテャ）の意味内容にある。サンスカーラは「構成要素をしかるべき位置に配備して」（*sam*）、「（個物、個体へと）作り上げること」（*skāra*）を意味する。（*s*）*kāra*は「つくる、（に）する」を意味する動詞に*s*-mobileとよばれる化石的要素が付いたものである。アリストテレースの『形而上学』におけるエイドス（形相、設計図）を思わせるが、その実在を否定する。『阿毘達磨倶舎論』（後四世紀）によれば、

「もし、それが各部分に分割されると、それについての理解が生じないもの、それは仮象としての（世俗的意味での）存在である。それは例えば壺のように。それが各切片に割れると、壺という理解は生じない。」

実在するものとは、永遠に存在し続けるものであり、作られたもの、構成されたものは必ず消滅する。これが、「諸行無常」の意図するところである。

後世の仏典から、グレコバクトリアのメナンドロス王（後二世紀）と仏教教団の長老とに仮託された一節を引こう（『ミリンダ王の問い』Trenckner版27頁）。

「もし君が、大王よ、車（軽戦車）で来たのなら、車（というもの）を説明せよ。いったい軛が、大王よ、車なのか。」「いいえ、あなた様。」「車軸が車か。」「いいえ、あなた様。」「車輪たちが…」「車室が…」「車枠が…」「軛が…」「手綱たちが…」「駆立て用の棒が…」「いいえ、あなた様。」「いったい、大王よ、軛・車軸・車輪・車室・車枠・軛・手綱・駆立て棒（の集合）が車なのか。」「いいえ、あなた様。」「それでは、大王よ、軛・車軸・車輪・車室・車枠・軛・手綱・駆立て棒以外に車があるのか。」「いいえ、あなた様。」「君に私は、大王よ、尋ねても尋ねても、車が見えない。それでは車は、大王よ、言葉に過ぎないのか。それでは何がこの際車なのか。誤った嘘言を君は、大王よ、語っている。車は存在しない。君は、大王よ、全ジャンブー大陸（インド）において筆頭の王である。

それなのに何を恐れて君は嘘を語るのか。」…「私は、あなた様、ナーガセーナよ、嘘を述べていない。軛に依拠して、車軸に…、車輪たちに…、車室に…、かつ車枠に依拠して、車という名称、共通の理解、諒解の手立て、言い習わし、名が成立する。」

注目されるのは、部材の総体を車と認めない点である。つまり、設計図を欠けば車は存在しないということであろう。しかし、仏典は「設計図、観念像」自体の実在性そのものを、際どいところで否定した。

5 縁起と法

相互依存性は、パーリ語でパティッチャ・サムットパーダとよばれ、縁起と訳される。「(に) 依拠して (何ものかとして) 成立すること」を原義とする哲学的複合語である。複数の相互依存の原理が、最終的には、無知から始まり老死に終わる十二支縁起の連鎖にまとめられた。ヤージュニャヴァルキャはカーマ「欲望」を輪廻存在の原因に据えたが、仏教、ジャイナ教ではタンハー「渇き」に置き換えられ(↓3)、「渇愛縁起」として第八支以降に置かれた。

事物は、同時の視点から見ると、諸法則の相互作用の上に仮に現象しているに過ぎず、ダルマ (漢訳「法」、[諸存在を] 支えて [成り立たせて] いるもの、法則、性質、範疇) という観点から語られる。通時的には、サンスカーラ「行」から捉えられる。

6 輪廻と「識」、衆生

アートマンを語らない仏教は、ヤージュニャヴァルキャの教説中に重要な役割を演じる識別作用に輪廻の中核的役割を負わせる。先述の五蘊中の識 (ヴィジュニャーナ) がそれである。識を巡る考察は仏教教義の中核を成し、唯識学派の「アーラヤ識」説などへと展開する。認識中にあるものだけが捉えられ論じられるとし、外界の分析を重んじないインド一般の「主知主義的」傾向は、仏教に特に強い。

輪廻中の存在はその度ごとに構成要素に依拠して構成される相対的存在で、実体としては存在しない。それらは輪廻の度に、犬なら犬、人なら人の、さらに人の中でも特定の個人の「設計図」に従って構成されるが (サンスカーラ)、設計図は一回限りのもので、実在する (サッテャ) ものでも恒存の (ニッテャ) ものでもなく、「空」である。

輪廻中の存在には、サットヴァ「存在者」という語が用いられる。「衆生」と訳されるが、「存在すること、本質」を意味する中性名詞を男性名詞に変え、アートマンの語を用いずに輪廻主体を表現しようとしたものであろう。

7　仏典中に保存されたヴェーダ時代の観念

既述のように、ブラーフマナ時代には、生前地上から届けておいた自分の「祭式と布施の効力」と、死後天界で合体し、これを糧に長い寿命を享受し、それが尽きると天上で「再死」して地上に戻る、とする観念があった。仏教では天（神）、人、阿修羅、畜生、餓鬼、地獄の六つの行き先（六趣）を考え、部派の教義（アビダルマ）では、移動の中間に四十九日間のアンタラー・バヴァ「中間のありかた、中有、中陰」をおいた。中有は、南伝パーリ仏典ではガンダッバと呼ばれる。漢訳の乾闥婆で、インド・イラン共通時代に遡るガンダルヴァである。本来の語義は不明であるが、天上に生まれ変わった祖霊を謂うと考えられる場合が少なくない。後には、天界の楽師として天女アプサラスと対になる。祖霊が里へ帰ってくる様子を仮面舞踏や音楽によって擬した、季節祭や儀礼の風習が背景に考えられないであろうか。石窟寺院の天井には天界の入り口が描かれ、その縁に見られるアプサラスやガンダルヴァは天界の下部に住む祖霊たちの姿かもしれない。仏典の天人五衰は天界で寿命が尽きる時に現れる五種の兆候をいう。中有とは、そもそも、再死が地上への再生の観点から捉えなおされる際（→3）、地上―天界―地上の一巡（サンサーラ）の中、ガンダルヴァに代表される天界の部分が四十九日に短縮されたものに由来する可能性がある。

幸若舞などに知られる「人間五十年下天の中に比ぶれば」は『阿毘達磨倶舎論』の「男たちにとっての五十年は、欲界において、下の方にいる天を住まいとする者たちの昼夜である」に由来する。人の寿命は本来百歳で、天界の最下層に棲む者たちにとっての一昼夜に当たるとされていたが、これを半分の五十年として定式化したもので、これもブラーフマナ時代の観念の名残である。

仏教研究も、インド学という枠組みで捉えなおすべき段階に差し掛かっている。しかし、仏典の言語は多様かつ難解であり、未だに学術的文法が著わされていない。新出の写本も多く、今後に残された課題が大きい。

（東北大学大学院文学研究科／インド文献学・言語学）